



「ひらほく新聞」で検索!
★10年目 感謝で突入110号★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

語り継ぐ使命 知覧からメッセージ

七十余年前に、実際にあった出来事。終戦記念日を迎える八月は毎年、その語り部からのメッセージを一人でも多くの方へ届けたいと切実に感じる。第二次世界大戦末期、祖国日本、そして愛する人を守るために沖繩の海へと消えていった陸軍特別攻撃隊(特攻隊)の若者たち。彼らが命を懸けて遺したメッセージを、いまを生きる私たちはどのように受け止めればよいのか。愛読する人間学を学ぶ月刊誌『致知』八月号の特集「後世に伝えたいこと」より、知覧特攻平和会館の語り部を長年続けてきた川床剛士さんの『知覧からのメッセージ』特攻隊の若者たちが遺したものを、紹介させていただきます。

特攻隊の語り部は 自分の使命

歴史的背景

陸上自衛隊を退官後、一九五五年、五十五歳の時に故郷の鹿児島に帰って建設会社で働き、六十歳の定年に際し、語り部にと声がかかった。特攻隊や知覧特攻平和会館について詳しくは知らなかったが、何より、特攻隊の歴史や彼らが遺した思い、戦争の悲惨さを後世に伝えていくことは、先の大戦で戦死した父の思いを伝えることでもあり、自分の使命なのかもしれないと思いで、語り部になることを決めた。

以来、特攻隊について勉強を重ね、毎年国内外から訪れる約四十万人の来場者の方々に講話を行ってきた(修学旅行で訪れる学校は年間約五百校)。

後に残る者を信じて若者たちは旅立っていった

特攻作戦とは、具体的にいうと、重さ二百五十キロの爆弾を戦闘機に装着し、敵艦目掛けて体当たりして沈める、つまりパイロットは必ず死ぬという「必死条件」の作戦だった。

三角兵舎

連合国の空襲により大きな被害を受けた祖国の現状を見た特攻隊の若者たちは、「ああ、もう日本は負けるだろう」と思ったことだろう。それでも、戦争に負けるのをただ手をこまねいて待っているわけにはいかない。自分たちが敵艦を一隻でも二隻でも沈めることによって、祖国が救われ、親きょうだいが助かるのである、それもまた立派な命の使い方ではないか。そして戦争が終われば、きつとまた日本が復興する時が来る。その時、後に残った者たちが自分たちの分まで一所懸命、祖国再建に向かつて頑張ってくれよう…。

だど私は思う。平和ないまを生きる私たちに想像すらできない過酷な時代を、特攻隊の若者たちは本当に真剣に受け止めて、自分を育ててくれた祖国、父母に感謝をしながら、短い一生を懸命に生き抜いたのです。

もちろん、皆がいつも明るい笑顔だったわけではない。全国から知覧に集められた特攻隊員は、「三角兵舎」という建物で出撃するまで起居していた。(特攻平和会館の敷地内に復元されているが、建物の半分が地下に埋まっています、窓もなく、とても薄暗い建物)

この兵舎内を寝ないで番をする不寝番が夜中に見て回ると、頭からすっぱり毛布を被って、肩を震わせながら泣いている特攻隊員も多かったという。それには死ぬことへの恐怖、せつかく人間としてこの世に生まれたのに、僅か十七、十八歳で死ななければならぬのかという悔しい思いもあったのだらう。彼らにもいまを生きる若者と同じように夢があり、希望があり、やりたいことがたくさんあった。愛する祖国や家族のためにという思いと、夢と希望を諦めなければならぬ悔しさとの葛藤。その葛

生きられなかった人の分までいまを一所懸命に生きる

世界ではいまだに悲惨な戦争が繰り返されているが、日本は戦後、見事な復興を遂げ、平和と繁栄を極めてきた。しかし、それは後に残る者を信じて特攻していった若者たちの願いと祈り、それを受け継いで一所懸命精進をしていただいたご先祖様がいてくれたからこそです。戦争で生き残った人たちは皆、共に戦い無念のうちに戦死した同僚や友人に申し訳ないという思いで、日本の復興のために尽くしてきたのです。

いまを生きる私たちが、本当に素晴らしいご先祖様をいただいたことに感謝すると共に、生きようとしても生きられなかった人たちの分まで充実した人生を送っていかねければならぬ。知覧特攻平和会館を修学旅行などで訪れた子どもたちにも、特攻隊の遺書や手紙を目で見るのではなく、ぜひ心で読んで、一つ

でも一つでも、自分の人生の糧にしてほしいと伝えていきます。

そして、長い人生の中では時に悲しいこと、苦しいこと、ひよっとしたら死にたくなるようなことに直面するかもしれない。そんな時には、短い人生を一所懸命に生きた特攻隊員を思い出して、死ぬために頑張るのではなく、生きるために、世の中の役に立つ人間になるために頑張ってほしい。

語り部をしていると、若くして死んだ特攻隊たちが、その時の笑顔のまま、空から「皆さーん！僕たちの分まで素晴らしい人生を過ごしてくださいー！」と私たちに叫んでいるように感じます。

私はいま七十八歳ですが、特攻隊員たちのことを思うと、余生をのんびり生きることなどとてもできない。毎日三時には起床して本を読み、英語も六十過ぎからコツコツ勉強し、いまでは海外の人にも不自由なく特攻隊のことを伝えることができようになりまし。ご先祖様、親きょうだいに、愛する人への感謝の念を持って、その日、その時を一所懸命に生き、世の中のために貢献していく…。

これが知覧からのメッセーであり、後に残った者たちの使命でもある。そう私は思うのです。(終わり)

編集後記

当紙面、昨年(2016)の八月号でご紹介した、知覧に近い黒島という島で実際にあった感動悲話『黒島を忘れない』という史実にしても「命を懸けた本当の友情と絆」と題し、「これから特攻して死ぬという状況でも、同期を思い約束を果たした安部大尉。まさにその生き方は、命を懸けてまで自分のことを考えてくれる人こそ真の友であり、友情であることを教えてくれます」と紹介されていきました。

(ご希望の方にバックナンバーをお届けいたします)

上記に大きくご紹介しました「特攻隊・茂さんの遺書」は以前、神田中学校体育館での、有難い縁の二年生全員への「いのちのお話」講話の際に、マイクを置いて気持ちを込めて大きな声で読ませていただきました。年の近い七十余年前の若者の思いがいかに伝わったか…。学校では教えてくれない真の歴史を学び、後世に伝えていくことは、まさにこの時代を生きる私たちの使命です。

先月、令和になって二度目の靖國神社参拝をいたしました。今月八月には、そこに眠る我が祖父に正式参拝であらためて感謝のご挨拶を捧げてきます。感謝合掌。

特攻隊の遺書が教える愛と感謝の大切さ

表面の川床さんのメッセージの続きです。

遺品室にある彼らの手紙や遺書を分類すると、特攻隊としての使命感に溢れたもの、家族・愛する人への感謝の念、同僚への友情、現在の心境を綴ったもの(概ね分けることができません。その中から、どういふ思いで特攻隊員たちが飛び立っていったのかがよく伝わってくるものをいくつかご紹介いたします。

家族へ向けた遺書はたくさんありますが、ほとんどが母親に対する思いであり、父親のことはあまり出てきません。特攻隊の青年、少年たちも、本当に自分に深い愛情を注いでくれたのは母親だという思いがあったのでしよう。彼らの遺書を読むと、いまを生きる私たちがどれだけ母親、家族に対して日々感謝をしているだろうか、大切にしているだろうかと思わざるを得ません。

|||||

三つの遺書が紹介されていましたが、驚いたことに自分が二〇一〇年に念願だった知覧を訪れたときに最も印象に残った遺書二つ(三つ)のことが書かれていました。以前、戦後七十年に当たる

二〇一五年八月号の当紙面にご紹介しましたが、『致知』誌面からの引用含め、あらためて掲載します。

一つ目。母親が病死し、馴染めずにいた再婚した新しい母親宛に書いた遺書。

「母上御元氣ですか。永い間本当に有難うございました。我六歳の時より育て下されし母。継母とは言え世の此の種の女にある如き不祥事は一度たりとてなく、慈しみ育て下されし母。有難い母 尊い母。俺は幸福だった。

遂に最後迄『お母さん』

と呼ばざりし俺。幾度か思い切つて呼ばんとしたが、何と意志薄弱な俺だったろう。母上お許し下さい。さぞ寂しかったでしょう。今こそ大声で呼ばして頂きます。お母さん、お母さん、お母さんと」

二つ目。二十九歳の爆撃機の機長は、四歳の男の子と二歳の女の子を持つよき父親。幼い子供たちにに少しでも早く父親の思いを伝えたいと、国民学校で最初に学ぶ片仮名を選び、二人へ向けた思いが、すべて片仮名で書かれていました。

「正憲、紀代子へ 父ハ スガタコソミエザルモ イ ツデモオマヘタチヲ見テイ ル。ヨクオカアサンノイヒ ツケヲマモツテオカアサン

ニ シンパイヲカケナイヨ ウニシナサイ。ソシテオオ キクナツタナレバチブンノ スキナミチニススミリツパ ナニツポンチンニナルコト デス。ヒトノオトウサンヲ ウラヤンデハイケマセンヨ。『マサノリ』、『キヨコ』ノオトウサンハ、カミサマニナツテフタリヲチツト見テキマス。フタリナカヨクベンキヨウヲシテオカアサンノシゴトヲテツダイナサイ。オトウサンハ『マサノリ』、『キヨコ』ノオウマニハナレマセンケレドモフタリナカヨク シナサイヨ

(後略)

母と子、父と子…親子の情愛や絆の尊さを教えてくれるのも、特攻隊の遺書の大きな特徴です。

|||||

『人生に迷ったら知覧へ行け』という永松茂久さんの書籍もあります。それぞれに深い思いのこもったたくさんの遺書たち。じっくりと拝読する時間はありませんでしたが、心深くにしっかりと残っています。

修学旅行の生徒さんへボランティアさんが、特攻隊員が飛び立つとき、二度覚悟をするという悲壮なお話をされていきました(過去紙面掲載)。あの時のボランティアさんが、川床剛士さんだったのではないかと、と思えてなりません。

謹啓、初春の候と相成り、その後、ご両親様には、お変わりなくお暮らしのことと思えます。

お父さん、お母さん、喜んで下さい。

祖国日本興亡のとき、茂も待望の大命を拝しました。

心身ともに健康で、任務につく日を楽しみに、

日本男児と、大橋家に、父と母の子供と生まれた喜びを胸に抱いて、後に続く生き残った青年が、戦争のない

平和で、豊かな、世界から尊敬される、立派な、

文化国家を再建してくれる事を信じて、茂は、

たくましく死んでいきます。

男に生まれた以上は、立派な死に場所を得て

大空の御盾となり、好きな飛行機を、我が墓標と散る

覚悟であります。

親より先に死んで、親孝行出来ない事をお許し下さい。

お父さん、お母さん、長生きして下さい。

お世話になった皆様方に、宜しくお伝え下さい。

この便りが最後になります。

昭和二十年三月二十四日

遠き台湾の特攻基地より

茂

茂

父上様

母上様

身はたとえ 南の空で果つるとも

とどめおかまし 神鷲の道

大命を拝して十八歳 茂

◎こちらの手紙は、崇拜する博多の歴史女・白駒妃登美さんの書籍『ころころに残る現代史』の巻末に掲載されていたものです。東日本大震災後の発刊、「今を生かされている私たちの務め」とい

う思いとともに、この「特攻隊の遺書」を『先人が私たちに託した思いとは何だったのか、その溢れるほどの思いが伝わる一通の手紙をご紹介させてください』と結ばれていました。